

一九五〇年代の遺児参拝の原風景を追う

一九五〇年代の靖国神社遺児参拝（8）

松岡 勲

はじめに

今回、私が追ってきた一九五〇年代の靖国神社遺児参拝について、いくつかの資料で再現してみました。また、当時の私の出身中学校が遺児参拝に関与したのかどうかも調べました。その中で当時の教員のお一人の大森龍三さんと出会え、戦争体験をお聞きできたことは得難い体験でした。

福井県「遺児靖国神社に参拝」（動画）

福井県のホームページに一九五〇年代の靖国神社遺児参拝の動画がありますが、再度調べて見ました。（福井県 靖国神社遺児参拝」で検索すれば出てきます。）タイトルは「遺児靖国神社に参拝」（制作…一九五七年七月三日）。以下、動画を再現します。

「遺児の靖国神社参拝が今年（一九五七年）も六月六日と十日の二回に別れて行われました。」（タイトル）

「お母さんたちの暖かい見送りを受けて全員元気で上京しました。」（敦賀駅、福井駅での見送り風景、車中）

「今は神として鎮まる臉のお父さんに会える感激に身を震わせ

ながら、靖国の大鳥居をくぐりました。」（靖国神社大鳥居）

「県人会の人々や羽根知事の激励を受けた後、いよいよ昇殿参拝です。」（激励会、昇殿参拝）

「こんなに立派に成長したわが子の姿に亡くなったお父さんはどんなに喜んでいいことでしょう。」（昇殿参拝）

「この後、一行はバスを連ねて東京都内を見学しました。」（皇居、羽田空港、国会議事堂）

「楽しかった数日、お父さんと対面した喜びは遺児たちにとって生涯忘れることができない思い出となるでしょう。」（帰郷）

なお、この映画は福井県制作の「県政ニュース」（一九五二年～一九七三年）として県内の映画館で上映されました。広報課によると、遺児参拝の県政ニュースはあと二本作られているとのことでした。（併せてタイトルと制作年を記します。）

「遺児靖国神社参拝」（一九五三年七月一三日）

「遺児靖国の父と対面」（一九五四年八月二四日）

「遺児靖国神社に参拝」（一九五七年七月三日）

福井県の靖国神社遺児参拝は、一九五二年五月が最初で、一九五九年五月を最後に実施され、「この約一万人の中学三年生を主体とした『靖国の父』との対面旅行を全額県費をもって実施した県は、類を見ないものである」（恒久平和のために 平成のあゆ

み」福井県遺族連合会、二〇一〇年五月三十一日刊」と記されています。

ちやうどこの時代は自衛隊ができ、日本の再軍備が進められていましたから、もし戦争になっていれば遺児たちは銃を持たされて、戦争に動員されていたかも知れません。そのような「刷りこみ」が全国的に行われていたことを、この映画はありありと想像させてくれます。

靖国神社参拝「遺族の顔」

友人に教えてもらい、一九五〇年代の靖国神社参拝の様子を伝えた「毎日グラフ」(一九五二・四・二〇)を入手しました。以下その内容です。説明文と写真のキャプションは以下の通りです。併せて写真も見てください。

靖国神社に各地から集まった「遺族の顔」

この日も、靖国神社の境内は地方から上京した戦没者遺家族の団体で埋まっていた。三月下旬は、靖国詣での特別列車が仕立てられて、毎日十県余りの集団が、靖国の鳥居をくぐった。

次から次から、何百人かの群が。日に何千人かの人たちが。

父を、夫を、息子を、兄弟を、戦争で奪われた遺族たち。その人数の多さが、戦死者の多さを想わせる。戦争は、何となくさんの市民たちを戦場で殺したことか。

遺族の多くは、紋付や古モーニングなど、黒っぽい服装をしている。その集団から、暗いカゲリが漂うのは、そのためばかり

りではあるまい。この人たちの表情そのものが、暗いのである。その肩が、脱力した疲労の形を示しているのである。その歩みが、頼りなげに侘しいのである。そして、その集団には、喪失感が、何かあるべきものを失った空しさが、体臭となって匂うのだ。故郷の家では、立派に社会人としての暮らしを立てている人たちであろう。が、遺族として、団体で靖国神社に足を踏み入れた時、この人たちは、失ったものを改めて想うとともに、げっそりと疲れの色を見せる。この喪失感は、一生彼らから去らない。彼らが永久に背負わなくてはならない重荷なのだ。いや、この人たちがばかりに限らない。日本人全体が、いつまでも忘れることのできない喪失感なのではあるまいか。

「もつとも痛ましいのは、息子に死なれた老母の姿だ。その顔には、頼りなげな疲れが深く彫りこまれている。世の母親たちを、二度とこういう顔にさせないように・・・」

「この人たちには靖国神社は永久に神聖である。」

「昇殿参拝では、ハンカチを目に当てる人も少なくない。息子を失った母親たちに多い。」

『戦死した息子は、あなたと同年』こういわれて無事復員した記者は辛かった。」

「父親を覚えていない遺児たちの団体が、靖国神社境内の遺族会館で無心に眠っていた。」

「長途の旅疲れか『いや、くたびれちゃいない』と答えるが、隠せない疲れた顔。」

また、別の週刊誌で宮城県の遺児参拝の写真も見つけました。
（「日本の断面 靖国神社」、「週刊朝日」一九五六年四月二九日号）写真には同時代の雰囲気が見れています。以下に写真のキャプションを記します。

「最近、遺児や遺家族の参拝がふえている。その群を見ていると、『こんなに沢山の人が・・・』と思わざるを得ない。これは三月三十一日参拝した宮城県の遺児七百八十三名の一部である（神門付近）。」



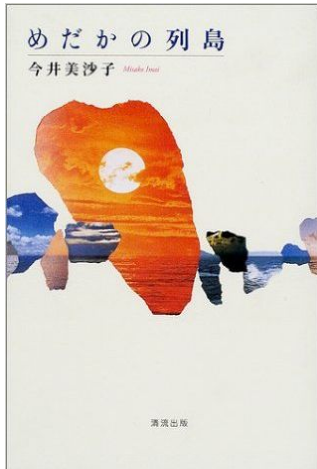
「週刊朝日」（1956.4.29）

靖国神社遺児参拝を遺児以外から見たとき

今井美沙子著『家族のスケッチ 五島福江新栄町』（ドン・ボスコ社）を読みました。私の友人が調べている一九五〇年代の靖国神社遺児参拝に関わるものがこの本にあると知らせてくれたのです。その中に「戦争はすかん」という一編がありました。隣家の六年生の好子さんが靖国神社遺児参拝に参加することになり、男でも同じ町内のせいちゃんが行くといいます。それで新栄町の子どもたちは大騒ぎになります。昭和三〇年代（一九五〇年代後半）に長崎県の五島から海を渡り、遠い東京へ行くということとは、「ああ、好子ちゃんやせいちゃんが羨ましかあ」ことであり、この主人公のミンコも「羨ましい」ひとりであったのです。この箇所で、私の中学校三年生時の靖国神社参拝の際には気がつかなかったのですが、当時の同級生に対して「羨ましく」感じさせたことだろうと改めて思いました。五〇年代の遺児参拝では、参拝する遺児にこのような形で「選ばれた」意識（選良意識）を持たせ、もし再軍備になれば、「戦死した父」に続いて、その子どもたちに銃を持たせようとする狙いがあっただろうと想起させられました。この後、家族の中で「おりゃあ羨ましいかあ！」というミンコの考えが話題になり、「ミンコ、好子さんが東京へ行けるとは戦争でとうちやが死んだからじゃろ。そうしたら考えてみい。ミンコがもし、東京へ代表で行けるとしたら？靖国神社に行けるといことは、とうちゃんが戦争で死んだつちいことぞ！」と姉に諭されます。ミンコは鉄の棒で頭をなぐられたよう気持ちになつて、ことの本質に気づきます。

さらに参拝から帰って来た好子さんに「東京へ行ったばってん、ちっとも嬉しかことはなかったよ。靖国神社に行つて、生きたとうちゃんに会えたんじやつたらよかったばってん、影も形もなかとじゃもん、いくら、先生に、ここにお父さんがまつられてますって説明ばされても、おりゃあ納得せん」と聞かされます。実に鮮やかにその時代の靖国参拝に関わる様を写しとり、当時の私自身の心象風景にも重なりました。

『家族のスケッチ』は一九五〇年代後半の長崎県五島福江地方の貧しくとも「人々のあたたかい心が充滿していた」生活が生きて描かれ、また著者の家族の生活の核にカソリックの信仰が息づいていることが活写されていました。この本の前に同著者は『めだかの列島』（筑摩書房）を出しています。『家族のスケッチ』は高度経済成長前の時代の長崎県五島福江に生きる父母と子どもたちを描いた児童文学でしたが、『めだかの列島』はその時代の五島福江を綴った記録文学です。そこに綴られた姿がこどもの世界に移しかえられて『家族のスケッチ』になりました。よい本に出会えるとはうれしいものです。



「めだかの列島」(復刊・清流出版)

遺児参拝に学校側の関与があったかどうか？

遺児参拝の学校側（私の卒業した茨木市立養精中学校）の関与を調べてみました。当時の学校側の関与を示す文献（校務日誌、学校沿革誌）を茨木市史編纂室、養精中学校に尋ねましたが、文献は残っていない、その実態は分かりませんでした。

これ以外の方法として、茨木市の退職教職員の会を通じて私の中学校三年生当時の教員を探しました。当時の私の担任とは既に再会しており、二年前には五〇年ぶりにクラス同窓会もしました。担任の林實さん（同窓会の時、八〇歳でした）は「当時新任教員だったので、まったく靖国神社遺児参拝を、また、君が行っていたことも知らなかった」とのことでした。先生はその後、脳梗塞で倒れられ、闘病生活を続けておられます。

さらに教員の人間関係をつなげて、当時の教員を探し、家庭科の女性教員（一人は現在八九歳の当時三年生担任だったSさん、もう一人は八七歳の当時担任外だったIさん）に電話で聞きましたが、「そのことは知らなかった」とのことでした。

それで、さらに当時三年生の教員だった大森龍三さんと連絡がつき、電話でお尋ねしましたが、大森さんは確信を持って「学校は関係していない」という返答でした。大森さんは茨木市の「同和教育」創生期の方です。また、お兄さんがフィリピンで戦死されたとの事で、後にお話を聞きにお伺いしました。

ということ、私の出身校では遺児参拝に関与がなかったとの結論ですが、茨木市全体、大阪府全体ではどうだったかは正確なところ分かりません。私の出身校で学校側の関与がなかったとし

ても、茨木市全体ではどうか、大阪府全体ではどうだったのかの問題が残ります。毎年千名規模の参加生徒の選抜と参拝行事にはたして学校が関与せずにできたのかどうか疑問があります。この問題については結論を留保したいと思います。また考えていますのは、もう一度、「靖国文集」に戻り、「テキスト分析」をしようと思っています。文献はこれ以外にはないと言っても過言ではないのですから。



茨木市立養精中学校卒業アルバム（1959・3）より
最前列左から4人目、大森龍三さん、右から5人目、林實さん

大森龍三さんの戦争体験

大森さんには今年の六月と十月にお会いしました。大森さんは一九二五（大正一四）年九月生まれで、今年の九月に九〇歳になりました。大森さんとお兄さんの則夫さんとは三歳違いで（当時お兄さんは二十歳、大森さんは十七歳）、お兄さんはフィリピンのレイテ島で戦死されました。一九四三年一月に最後の面会が京都市の東本願寺で行われ、両親と一緒に面会に行かれました。兄は夏服を着ていたのので、「南方やな・・・と思った」そうです。所属部隊は第十六師団中部第三七部隊（垣部隊）で、第十六師団は一九四一年九月に京都で編成され、京都市の深草・伏見に司令部を置き、「対米英開戦の直後にフィリピンに上陸し、最後はレイテ島で『玉砕』しました。」（竹島良成「京都師団の日常」京都教育大学紀要、一〇八号）

フィリピンからは軍事郵便が三度来たのですが、一九四四年、四五年には便りは途絶えたそうです。以前に読んだ大岡昇平著『レイテ戦記』を思い起こし、激戦のレイテ戦を想像しました。戦後の一九四七年に京都府庁から遺骨を取りに来るようにと連絡があり、出かけましたが、白木の箱には石が入っていただけで、遺骨はなかったとのことです。戦死された時期、場所も分からず、軍の報告は「レイテの守備についていた」とだけで、大森さんは「やめた」（いいかげん）であると言われました。

大森龍三さん自身も徴兵年齢の引き下げの結果、一九四四年に一九歳で徴兵検査を受けました。加藤陽子著『徴兵制と近代日本一八六八〜四五』（吉川弘文館）には、徴兵年齢の引き下げに

ついて、「昭和一七（一九四二）年二月十八日の兵役法改正は、勅令によっていつでも徴兵適齢を下げることを可能にした。これによって昭和十九年の徴兵検査は、満一九歳と満二〇歳の壮丁に對してなされた」と書かれています。翌年の一九四五年一月に大森さんは一九歳で徴兵されました。お兄さんと同じ第十六師団部中部第三七部隊第二中隊に配属されました。所属部隊は軽機関銃部隊であつたのですが、同年六月頃には急激に武器が減り、三八式歩兵銃さえもなくなったことを覚えていたとのことです。

三ヶ月の教育訓練の後、三月末に四日市市の航空隊の燃料を米軍の空爆から隠すため、滋賀県の山中（現在の甲賀市水口町貴生川）に掩体壕を掘る作業に大森さんは動員されました。その時の宿舎が天理教の教会（現在の天理教甲賀大教会）であつたのですが、教会員の子どもが走り回っていて、自転車のスポークで耳掃除をしていた大森さんにぶつかり、耳の大けがをしました。そのため、高熱を發し、軍医は大丈夫との診断だったのですが、上官が再度診察を指示し、診察の後、陸軍病院に入院となりました。そして、直後に予定されていた西部方面への派兵から逃れることができました。派兵先を大森さんは沖繩ではなかったかと想像されていました。というのは同じ部隊の同年兵は全員戦死しており、輸送船が沖繩に着くまでに米軍の潜水艦に沈没させられたのではないかと思われます。大森さんは事故のおかげで九死に一生を得て生き残りました。大森さんのお話を聞き、私たちの世代は戦争を経験した先生たちに教えられていたのだと再認識しました。この後、大森さんの戦後の「生」が始まりますが、話はここで置きます。

おわりに

今年の七月三一日に原告として参加している安倍首相靖国参拝違憲訴訟（関西）の第七回口頭弁論が開かれました。今回は原告九人の本人尋問でした。私もその一人として陳述しました。父の戦死と母の思い、そして私の生育史のなかでの戦争と靖国の問題について陳述し、私の息子や娘、孫たちを戦争に巻きこまないために、再び首相の靖国参拝が行われないように強く訴えました。この陳述直前に田中伸尚著『いま、「靖国」を問う意味』（岩波ブックレット）が刊行され、その中に私の靖国体験も入れていただきました。田中さんの聞き取りのおかげで、私の陳述に向けての心の整理ができて、大変ありがたかったです。次回は京都府下の靖国神社遺児参拝について、その後に明らかにしたことを報告したいと思います。

（二〇一五年一〇月二四日）



自宅前の大森龍三さん